《埼玉県納税貯蓄組合総連合会　優秀賞》

コロナ危機で感じた税と私たちの関係

向原中学校　三年　豊山　瑶乃

去年国税庁を見学する機会があった。その時の知識で、税の味方が変わった。それまで私にとって税金とは消費税など「払うもの」であった。逆に言えば、税のイメージはそれしか無かった。

同居する祖母と母の二人が昨年の秋の同時期にコロナにかかった。ＰＣＲ検査を受けて陽性と分かって直ちに治療薬が処方された。私は元々心臓が弱い祖母が一番不安だったが、看病していく中で重症化には至らずに済んだ。どうして重症化に至らなかったのか最初は分からなかったが、回復後に祖母に聞いたところ「ワクチンを打ったおかげかもしれないわ。」と言った。私はそこで思い出した。国税庁で学んだ時に税の一部がコロナウイルス対策に使われていることを。そのおかげで、ワクチン接種が無料になっていることも。そこで他にどんな対策に使われているか興味を持ち、調べてみることにした。

当たり前だと思っていたＰＣＲ検査が無料であることや、本来高額であるコロナ治療薬に補助金が助成されて安価で入手できることを知った。また、一人あたり十万円の特別給付金も税で賄われていることを知った。この給付金は、休業で収入が減った人や、お金を使う機会が減ったことから起きる経済の低迷を回復させるために給付されたと知った。

一方で、税を納める期間を特例で延ばすなどの措置で企業や個人事業主への救済も行った。

生活の安定を軸に置き、そのために多額の税金が使われていること。それに加えて納める税金では特例を設けて、国民の不安を取り除こうとする手段がとられていること。このどちらも『税金』が主体となっている。

中学生の私たちはものを買うときの「消費税」といういわば「納める税金」のごく一部しか意識する機会がないが、少し目を向けて見れば「使われる税金」が暮らしの身近なところにあった。また「納める税金」の使われ方も国民の暮らしの様子を判断して、そのタイミングなどを考慮する「調整弁」のような働きをしているのだと知った。

私は偶然国税庁に行く機会によって、税について深く知る機会があったが、ほとんどの人達はあまり知る機会がないと思う。これからは自分一人で知識を持っているのではなく周りにも税の知識を発信していきたい。また日々のお金の使い方や、目にする報道などで自分自身の税金への目線を養っていき、どのように国民の生活に根差しているかを多く知っていきたい。